

第4章

農村における 2010 年州議会選挙

1. パンチャーヤットの事例

本章では、有権者の投票行動の変化を村の政治と関連づけて考察する。パンチャーヤット・レヴェルにおいて、「アイデンティティの政治」は力を失い、「開発の政治」がより重要になったのか。両者はどのような関係に立つのか。2005 年 2 月州議会選挙の投票行動との比較分析を軸に、この問題を考えてみたい。

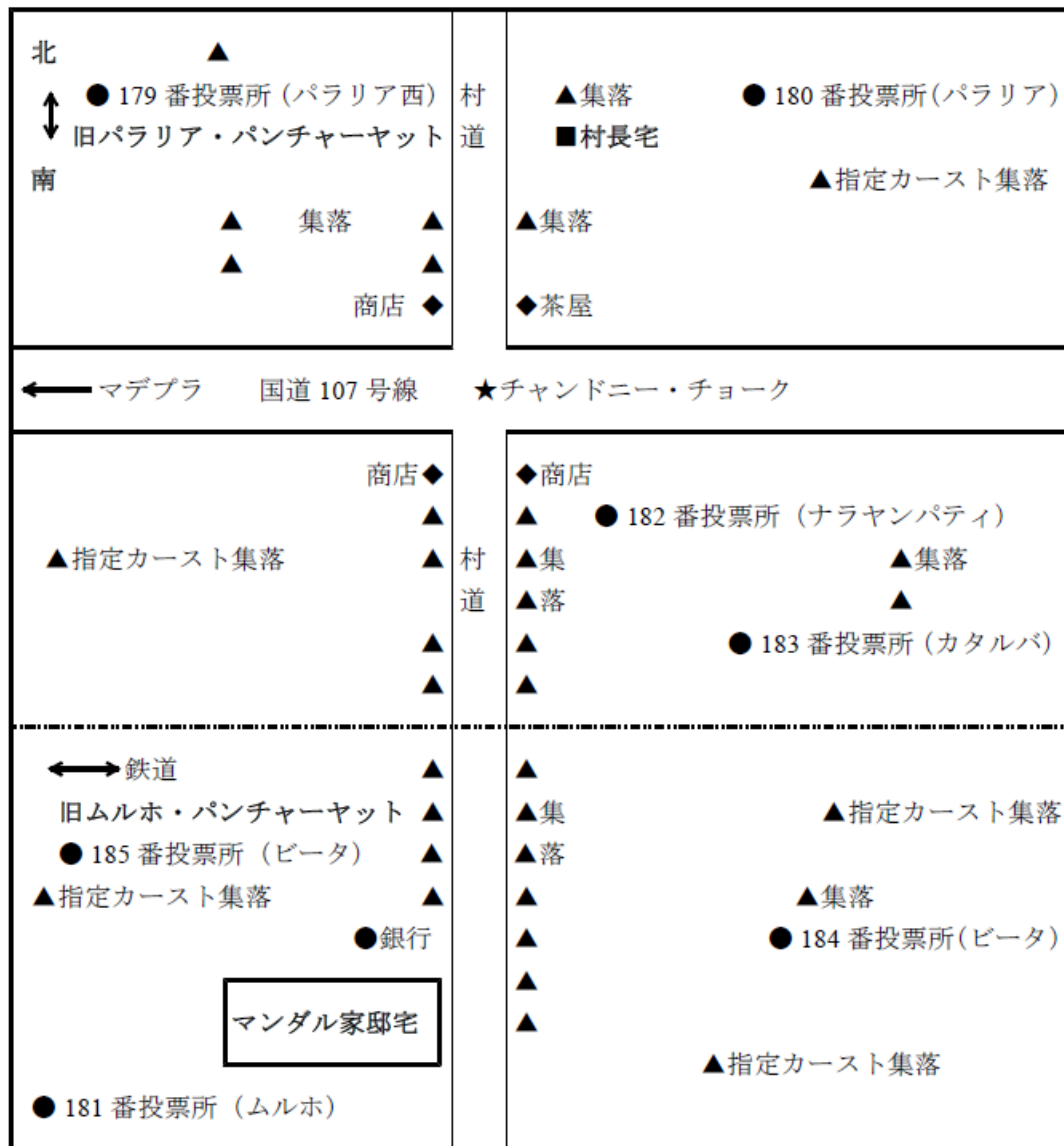
事例として選択したのは、第 1 章で言及したマンダル委員会の委員長 B.P.マンダルの出身村であるムルホ村である。前述のように B.P.マンダルは上層後進カーストであるヤーダヴ・カーストに属するが、生家は 3000 エーカーともいわれる所領を英領時代から経営する大ザミンダールであった⁽¹⁾。独立後ザミンダラー制は廃止されたにも関わらず、マンダル家はムルホ所領を維持して生き残り、大地主としての影響力を行使して現在に至るまで政治に積極的に関与している。

最初に、ムルホ・パンチャーヤットの概観を示しておこう。まず、地理的側面であるが、ムルホ・パンチャーヤットはマデプラ県の県庁所在地であるマデプラ市から東に 10km ほど行った田園地帯に位置する。国道 107 号線がパンチャーヤットを南北に分断し、国道と村道の交差点であるチャンドニー・チョークには小さな市場が設けられ、村人たちの交流の場になっている。選挙の時に候補者がまず立ち寄るのがチャンドニー・チョークであり、ミニ集会もしばしば開催されている（地図参照）。

2001 年のパンチャーヤット再編によって生まれたムルホ・パンチャーヤットは、元々はムルホ・パンチャーヤットとパラリア・パンチャーヤットという二つの独立したパンチャーヤットであった。国道の北側がパラリア、南側がムルホであり、それぞれ独立した行政単位として機能していた。パンチャーヤット法の改正により、パンチャーヤットの最小人口が 5000 人とされたため、1991 年統計で人口 4756 人のムルホと人口 1919 人のパラリアが合併することとなった。2001 年統計によると、合併後のムルホ・パンチャーヤットの人口は 8956 名となっている。選挙区については、下院選挙区がマデプラ下院選挙区、州議会選挙区もマデプラ選挙区に属している。

⁽¹⁾ 所有農地の規模については、ムルホ・パンチャーヤットでインド共産党（マルクス主義）（CPM）の活動家として有名なモハン・ヤーダヴ氏（Mr.Mohan Yadav）の証言（2004 年 2 月 15 日インタビュー）に従った。ジャナター・ダル（統一派）のマデプラ県支部長で B.P.マンダルの親戚に当たるラーマナンド・プラサード・マンダル氏（Mr.Ramanand Prasad Mandal）も同じ数字を挙げていた（2004 年 3 月 19 日インタビュー）。

地図 ムルホ・パンチャーヤット地図



(出典) 現地調査 (2004 年 2 月から 5 月、2005 年 2 月) に基づき筆者作成

(注 1) 集落について、▲印を集落としたが、実際の規模を表記すると煩雑になるため、場所の表記に止めた。集落間を結ぶ小道についても同様の理由から表記しなかった。指定カーストの集落は、基本的に他の社会集団の集落と離れた場所に位置している。

(注 2) ムルホ・パンチャーヤットには、投票所が 7 箇所存在する (●印で表示)。それぞれの投票所には投票所番号と名前を付記している。2005 年選挙までは 5 箇所だったが、2009 年下院選挙より 2 箇所増えた。

表 4-1 ムルホ・パンチャーヤットにおける有権者の社会集団構成（2004 年）

カテゴリー	カースト	人数（％）
上位カースト	バラモン（Brahman）	84（1.6％）
上層後進カースト	ヤーダヴ（Yadav）	3184（62.3％）
	バニア（Bania）	49（1.0％）
下層後進カースト	バライ（Barai）	14（0.3％）
	ダヌック（Dhanuk）	9（0.2％）
	ハルワーイー（Halwai）	96（1.9％）
	カルワール（Kalwar）	42（0.8％）
	カマール（Kamar）	29（0.6％）
	カヌー（Kanu）	25（0.5％）
	マリ（Mali）	17（0.3％）
	マッラー（Mallah）	54（1.1％）
	ナイー（Nai）	56（1.1％）
	サオ（Sah）	31（0.6％）
	タッタマー（Tattama）	126（2.5％）
	テーリー（Teli）	12（0.2％）
指定カースト	チャマール（Chamar）	248（4.9％）
	ムサハール（Musahar）	779（15.3％）
	ドービー（Dhobi）	16（0.3％）
	ドゥーム（Dom）	14（0.3％）
ムスリム		222（4.3％）
合計		5107（100％）

（出典）選挙管理委員会資料と現地調査より筆者作成。

（注）2004 年有権者名簿に基づいた有権者の社会構成（人口・人口比）を表記している。インドにおいては、18 歳以上の男女に投票権が与えられている。

社会的には、ヤーダヴが支配的なパンチャーヤットである（表 4-1）。2004 年下院選挙のために改訂された有権者名簿に基づく、有権者 5107 名中、ヤーダヴ・カーストに属する者は 3184 名おり、全体の 62%強を占めている。上位カーストであるバラモンは 84 名しかおらず、全体の 1.6%を占めるにすぎない。ヤーダヴの次に多数を占める社会集団は、最下層の指定カーストの中でもさらに下層に位置するとされるムサハールであり、779 名、15%強を占めている。第三勢力が同じく指定カーストのチャマールで 5%弱を占め、指定カーストを合計すると全体の約 20%を占めていることになる。ムスリムも 222 名居住し、全体の

4%強を占めている。

経済的にも、ヤーダヴが支配的だと言える。ムルホ所領はマンダル家の所領の中心であり、マンダル家の経済的影響力は依然として大きい。マンダル家とは親戚関係のないヤーダヴも、小作としてムルホ所領を借り受ける傍らで自作農として自らの農地を所有し、小規模ながらも経営を行っている。これに対して、ヤーダヴの農地で農業労働者として働くのがムサハール、チャマールなどであり、ヤーダヴは経済的にも、社会的にもムルホ・パンチャーヤットで支配的な地位を占めていると言える。それでは最初に、マンダル家の政治活動から検討しよう。

2. 大地主と政治

B.P.マンダルの父ラス・ビハーリー・マンダル (Ras Bihari Mandal) は、大ザミンダールであると同時に会議派の独立運動に参加した闘士であった⁽²⁾。ビハール州会議派のヤーダヴ政治家として影響力を持っていたと言われる。R.B.マンダルの末子として生まれた B.P.マンダルは、父親の政治的遺産を引き継ぐ形で政治活動を開始する。

まず 1951 年から 1952 年にかけて行われた第一回州議会選挙に、トリベニガンジーマデプラ選挙区から会議派候補として立候補した。同じ選挙区からは、遠戚にあたり同じく大地主であったブペンドラ・ナラヤン・マンダル (Bhupendra Narayan Mandal) が社会党から立候補し激戦となったが⁽³⁾、これを僅差で破って B.P.マンダルは初当選を果たす (表 4-2)。

表 4-2 マデプラ州議会選挙区結果 (1952-1962)

選挙年	当選	次点
1952 (Triveni ganji-Madhipura)	B.P.マンダル (INC) 17,838票 (23.1%)	B.N.マンダル (SP) 17,172 (22.2)
	B.シャルダール (INC) 17,683 (22.9)	A.パスワン (SP) 17,114 (22.1)
1957	B.N.マンダル (IND) 12,692 (52.1)	B.P.マンダル (INC) 9,670 (39.7)
1962	B.P.マンダル ¹ (INC) 24,451 (72.0)	B.カマット (SOC) 9,507 (28.0)

(出典) 選挙管理委員会資料より筆者作成。

⁽²⁾ サッチダナンド・ヤーダヴ教授 (Prof.Sachchidanand Yadav,B.N.Mandal University : 2004 年 2 月 4 日)、シャヤマル・キショール・ヤーダヴ教授 (Prof.Shyamal Kishor Yadav,B.N.Mandal University : 2004 年 2 月 5 日) に対するインタビュー。シャヤマル・キショール・ヤーダヴ教授によれば、代表を率いてインド大臣モンタギュに会いに行き、完全独立を要求したという。

⁽³⁾ B.N.マンダルは会議派社会党出身である。会議派社会党が会議派から追放されたために、社会党から立候補した。終生、社会主義者であるロヒアと常に行動を共にした。マデプラ県識字委員会書記長ゴヴィンド・プラサード・ヤーダヴ氏 (Mr.Govind Prasad Yadav,Secretary,Zila Saksharta Samiti : 2004 年 2 月 3 日) に対するインタビュー。

(注) 候補者名欄の括弧内は所属政党を示し、続いて得票数と得票率(括弧内)を示している。1952年選挙に関し、マデプラ選挙区は一般候補と指定カースト候補を二名選出する二人区だったため、当選者が二名存在した。

(略号) INC : インド国民会議派 (Indian National Congress) 。 SP : 社会党 (Socialist Party) 。 SOC : 社会党 (Socialist) 。 IND : 無所属 (Independent) 。

次の 1957 年選挙には、B.P.マンダルは同じく会議派候補として出馬し、再び B.N.マンダルと票を競うが、今回は敗北し議席を失う。1962 年選挙も再び会議派候補として出馬し、ライヴァルの B.N.マンダルが下院選挙に転じたことから、選挙戦を有利に展開し対立候補に圧勝した。しかし選挙後、会議派指導部と対立し、離党することとなった。

会議派を離党し統一社会党に入党した B.P.マンダルは、1967 年選挙は下院選挙に転じ、マデプラ選挙区から当選を果たす(表 4-3)。政治家としての絶頂期はここから始まり、前述のように 1968 年には、ビハール州政治史上初の後進カースト出身者として州首相に就任する。信任投票を乗り切れなかったため、一ヶ月ほどの在任にとどまったが、後進カーストの台頭という象徴的意味は担った。

1971 年下院選挙では、B.P.マンダルは自ら結党したショシット・ダルから立候補しインディラ派の会議派候補に敗れるが、1977 年下院選挙ではジャナター党候補として立候補し再び返り咲いた。前述のようにデサイ・ジャナター党政権より第二次後進諸階級委員会の委員長に任命され、「その他後進諸階級」に対する留保制度の制定作業に従事するが、ジャナター党候補として出馬した 1980 年下院選挙では会議派候補に敗北し議席を失う。落選後、報告書をインディラ・ガンディー内閣に提出し、1982 年 4 月 13 日に生涯を閉じた。享年 63 歳だった。

表 4-3 マデプラ下院選挙区選挙結果 (1967-1980)

選挙年	当選	次点	三位
1967	B.P.マンダル (SSP) 145,911 (51.7)	K.K.マンダル (INC) 108,485 (38.5)	H.P.シン (PSP) 27,708 (9.8)
1971	R.P.ヤーダヴ (INC) 146,232 (46.2)	B.P.マンダル (SHD) 118,323 (37.4)	R.N.プラサード (BJS) 44,792 (14.2)
1977	B.P.マンダル (BLD) 301,076 (65.4)	R.P.ヤーダヴ (INC) 100,359 (21.8)	K.シン (CPI) 44,336 (9.6)
1980	R.P.ヤーダヴ (INC[U]) 204,022 (46.4)	R.K.Y.ラヴィ (INC[I]) 146,524 (33.3)	B.P.マンダル (JNP) 59,424 (13.5)

(出典) 選挙管理委員会資料より筆者作成。

(注 1) 候補者名欄の括弧内は所属政党。下段は得票数と得票率(括弧内)。

(注2) 1969年の会議派大分裂後、選挙管理委員会はインディラ派を「INC」と認定した。インディラ派会議派は1978年に再び分裂し、インディラ派はINC (I)、反インディラ派は最終的に会議派(ウルス派) (INC[U])として選挙管理委員会に認定された。ウルス派は、カルナータカ州首相を1972年から1980年まで務めたデヴラージ・ウルス (Devraj Urs) を指導者とした。1980年選挙において、マデブラ下院選挙区においては、会議派(ウルス派)、会議派(インディラ派)、B.P. マンダルの三つ巴の戦いとなった。

(注3) 1977年選挙に際して、ジャナター党の結党は法的な手続きを踏まなかったため、選挙管理委員会はジャナター党を認定しなかった。従って、ジャナター党は、公式にはバラティヤ・ローク・ダル (BLD) として選挙戦を戦った。

(略号) INC: インド国民会議派 (Indian National Congress)。INC (U): インド国民会議派(ウルス派)。INC (I): インド国民会議派(インディラ派)。SSP: 統一社会党 (Samyukta Socialist Party)。PSP: 人民社会党 (Praja Socialist Party)。SHD: ショシット・ダル (Shoshit Dal)。BJS: インド大衆連盟 (Bharatiya Jan Sangh)。BLD: バラティヤ・ローク・ダル (Bharatiya Lok Dal)。CPI: インド共産党 (Communist Party of India)。JNP: ジャナター党 (Janata Party)。

B.P.マンダルにとって最後の選挙となった1980年選挙はマンダル家の代替わりの選挙でもあった。下院選挙に引き続く州議会選挙に三男のマニンドラ・クマール・マンダル (Manindra Kumar Mandal) が会議派候補として出馬するが、落選する。M.K.マンダルは、1990年州議会選挙にも会議派候補として立候補するものの落選し、2005年2月の州議会選挙でジャナター・ダル(統一派) 候補としてようやく初当選を果たした。初挑戦から25年が経過していた。出直し選挙となった2005年10月選挙でも再選され、州議会議員として一期務めるが、2010年選挙ではジャナター・ダル(統一派)の公認を得ることができず出馬できなかった。マンダル家の政治的影響力の低下を看取できる。

マンダル家の影響力の低下は、全国政治、州政治といった大きな場に限られない。パンチャーヤットのレベルにおいても、顕著である。ムルホ・パンチャーヤットの村長(ムキア)は、マンダル家出身のスバーシュ・チャンドラ・ヤーダヴ (Subash Chandra Yadav) がパンチャーヤット制度施行以来務めてきた。マンダル家が代替わりを迎える時期の1978年パンチャーヤット選挙においても、スバーシュが再選を果たしている。この時点ではまだ政治力の衰退は村レベルにはまだ及んでいなかったと言えよう。

ところが、ララー政権下で行われた2001年選挙において、スバーシュは落選してしまう。1978年選挙から23年ぶりに行われた2001年選挙は、現職のスバーシュの他17名が出馬する激戦となった。接戦を制したのは、パラリア出身のラージ・キショール・ヤーダヴであり、長年にわたりムルホを支配してきたスバーシュは、わずか2票差で敗北を喫した。引き続き2006年パンチャーヤット選挙は、村長ポストは女性の留保議席となったため女性しか立候補することができなかったが、現職のラージ・キショール・ヤーダヴの妻が立候補し、当選を果たした。このようにマンダル家の影響力低下は、村レベルの政治でも明確

に看取できる。それでは 2010 年州議会選挙はムルホ・パンチャーヤットでどのように戦われたらうか。次に検討してみよう。

3. 2010 年州議会選挙⁽⁴⁾

(1) マデプラ州議会選挙区結果

最初にマデプラ州議会選挙区の結果から検討したい（表 4-4）。マデプラ州議会選挙区において、主要な候補者は、RJD 候補のチャンドラシェカル教授と JD(U)候補のラメンドラ・クマール・ヤーダヴ・ラヴィ博士であった。チャンドラシェカルは、2005 年 2 月・10 月選挙に無所属候補として立候補し、かなりの票を獲得した実績があった。農村部において活発に活動する候補者として知られ、それ故に今回 RJD の公認を得ることができた⁽⁵⁾。州レベルで RJD が大敗した傾向とは逆に、マデプラ選挙区では彼が当選を果たすことになる。

表 4-4 マデプラ選挙区結果（州議会選挙：2000-2010）

選挙年	当選者	次点	第三位
2000年	Rajendra Pd. Yadav	Kapildeb Mandal	Sanjay Kumar Yadav
	RJD: 77,282(58.7%)	JD(U): 41,924(31.8%)	SP: 2,829 (2.2%)
2005年 2月	Manindra K. Mandal	Chandrashekar Yadav	Siyaram Yadav
	JD(U): 30,293(34.3%)	IND: 19,583(22.2%)	RJD: 17,262 (19.5%)
2005年 10月	Manindra K. Mandal	Dr. Ashok Kumar	Chandrashekar
	JD(U): 34,582(38.9%)	RJD: 26,710 (30.1%)	IND: 10585(11.9%)
2010年	Chandrashekhar	Dr. R. K. Yadav Ravi	Suresh Kumar
	RJD: 72,481	JD(U): 60,537	JMM: 8,345

（出典）選挙管理委員会資料

（注）括弧内は得票率

（略号）RJD：民族ジャナター・ダル（Rashtriya Janata Dal）、JD(U)：ジャナター・ダル（統一派）（Janata Dal[united]）、SP：サマージワディー党（Samajwadi Party）、JMM：ジャールカンド解放戦線（Jharkhand

⁽⁴⁾ 本節は、2011 年 1 月 29 日・30 日に開催された国際会議“Understanding Global India: The South Asian Path of Development and its Possibilities”（NIHU program “Contemporary India Area Studies” and Global COE Program “In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa”）に提出されたペーパー Nakamizo, Kazuya “The Politics of Development and Identity under Globalization—2010 Bihar State Assembly Election, India—”に基づいている。コメンテーターを務めて下さった押川文子先生、三尾稔先生をはじめとする参加者の皆さんにこの場を借りて深く感謝申し上げたい。

⁽⁵⁾ チャンドラシェカルに対するインタビュー（2010 年 11 月 7 日）。インタビューを行った日も、村で起こった紛争を解決するために村を訪れていた。年齢は 50 歳である。

Mukti Morcha)、IND:無所属

対するラヴィ博士は、熟練の政治家である。ザミンダールの家に生まれた彼は、会議派の政治家として政治活動を始めた。1980 年下院選挙にインディラ会議派候補として立候補するが落選し、1984 年下院選挙で会議派の公認を得られなかったことから会議派を離党する。1985 年州議会選挙にローク・ダル候補として当選し、1989 年下院選挙ではジャナター・ダル候補として当選し念願の下院議員になった。1991 年下院選挙は、マデブラ選挙区では候補者が殺害されたため半年後に補選が行われ、本戦で落選したシャラド・ヤーダヴ（現 JD(U)総裁）に議席を譲ることとなった。その後、1992 年から 2002 年までジャナター・ダル、RJD 所属の上院議員を二期務め、2004 年下院選挙補選で RJD の公認を得ることができなかったため JD(U)に鞍替えし、今回、M.K.マンダルを退けて公認を獲得した⁽⁶⁾。それでは、ムルホ村民はどのように投票しただろうか。次に検討してみよう。

(2) ムルホ・パンチャーヤットの投票行動

今回の調査においては、38 名に対して投票後調査を行った⁽⁷⁾。まず社会集団毎の投票行動から分析しよう（表 4-5）。

⁽⁶⁾ ラヴィ博士に対するインタビュー（2010 年 11 月 3 日）。インタビューは自宅で行ったが、客間にはこれまでの政治経歴を示す写真が一面に飾られていた。インタビューにおいては、これまで自分の能力に見合った扱いを受けてこなかったと不満を吐露し、党に二回も裏切られた（1984 年と 2004 年）と怒りを滾らせていた。年齢は公式には 68 歳だが、実際は 72 歳であるということだった。

⁽⁷⁾ 調査期間は、投票日翌日の 2010 年 10 月 22 日から 11 月 6 日にかけてである。選挙結果は 11 月 24 日に明らかになったことから、選挙結果が出る前の選挙後調査として行った。今回の調査は、2004 年下院選挙、2005 年 2 月州議会選挙のパネル調査として行った。回答者の選出方法は、次の通りである。第一に、パンチャーヤットの選挙区に従って、ムルホ・パンチャーヤットを 13 に分割する。その上で、各パンチャーヤット議員を回答者として選んだ上で、他に最大多数コミュニティから 1 名、少数コミュニティから 1 名を無作為に選択した。これで基礎数は 39 名となる。この 39 名に加えて、村で政治活動を行っている者、各コミュニティの実力者、村長などを加えて 2004 年時の総数は 52 名となった。今回は調査期間が短かったこともあり、新たに加えた者も含め 38 名の回答しか得ることができなかった。

表 4-5 社会集団毎の投票行動 (2010 年州議会選挙)

社会集団	RJD	JDU	INC	Other	IND	N.A.	合計
バラモン			1				1
ラージプート	1						1
ヤーダヴ	14	3		1		4	22
バニア		1					1
ナイー	1						1
指定カースト		7		1		1	9
ムスリム	2		1				3
合計	18	11	2	2	0	5	38

(出典) 現地調査

(注) ムルホ村には上位カーストが少ないため、近隣のダボリ村に行ってラージプートの村長から聞き取り調査を行った。調査にはこの一名を含めている。

(略号) RJD: 民族ジャナター・ダル (Rashtriya Janata Dal)、JD(U): ジャナター・ダル (統一派) (Janata Dal[united])、INC: インド国民会議派 (Indian National Congress)、IND: 無所属、N.A.: 不明

表 4-5 によると、投票行動は社会集団毎にかなり明確に割れているように見える。最大コミュニティであるヤーダヴの多数は RJD 支持でまとまる一方、第二番目のコミュニティである指定カーストのほとんどは JD(U) 支持でまとまっている。「アイデンティティの政治」の時代は終わったというニティーシュの言明とは裏腹に⁽⁸⁾、「アイデンティティの政治」は健在であるように見受けられる。この傾向は、パネル調査の結果を検討するとより明確になる (表 4-6)。

ヤーダヴについていえば、2005 年 2 月選挙は票が分散していたのに対し、2010 年選挙は RJD 支持でほぼ固まっている。指定カーストについても、2005 年 2 月選挙は無所属候補に票が集まっていたのに対し、2010 年選挙では JD(U) にほぼ固まっていると言えよう。パネル調査の結果による限り、2010 年選挙は 2005 年 2 月選挙と比較して、特定の社会集団と特定の政党の間により明確な関係を看取することができる。

もっとも、この結論を導く前に、ムルホ村の特殊事情を考慮しなければならない。2005 年 2 月州議会選挙は、マンダル家から二人の候補が出た選挙であった。一名は前述の M.K. マンダルであり JD(U) の公認を得て出馬し、もう一名は小児科医である A.K. マンダルであった。詳細については別稿で分析したためここでは結論のみ述べるが[中溝 2008: 440-444]、二人の立候補がムルホ・パンチャーヤットの投票行動を複雑にしたことは否めない。しかし、仮に二人が今回立候補したとしても、趨勢に変化はなかったと推測できる。2005 年 2 月にムルホ・パンチャーヤットで最大多数票を獲得した A.K. マンダルの人気はすでに過去

⁽⁸⁾ ニティーシュ・クマール州首相インタビュー (2010 年 8 月 29 日)

のものとなっていたためである。その意味で、ムルホ村の特殊事情を考慮しても、「アイデンティティの政治」はなお健在であると指摘できる。

表 4-6 コミュニティー別パネル調査結果（2005 年 2 月－2010 年選挙）

カースト	2010RJD	2010(JDU)	2010Other	2010IND	N.A	合計
ヤーダヴ						
2005 RJD	1		1			2
2005 JDU	2	1			2	5
2005 Other						0
2005 IND	5				1	6
N.A	3				1	4
小計	11	1	1	0	4	17
他の後進カースト						
2005 JDU		1				1
小計	0	1	0	0	0	1
ムスリム						
2005 JDU	1					1
2005 IND	1		1			2
小計	2		1			3
指定カースト						
2005 JDU						
2005 Other						
2005 IND		4	1			5
N.A.		1				1
小計	0	5	1		0	6
合計	13	7	3		4	27

（出典）現地調査

（注）表の見方であるが、例えば二列目・二行目の 1（赤字表示）は、2005 年 2 月選挙で RJD を支持したヤーダヴが 2010 年選挙においても RJD を支持した人数を示している。

（略号）RJD：民族ジャナター・ダル（Rashtriya Janata Dal）、JD(U)：ジャナター・ダル（統一派）（Janata Dal[united]）、IND：無所属、N.A.：不明

次にアイデンティティに基づいた分析から離れ、経済的要因に基づいた分析を行ってみよう。表 4-7 は、ニティーシュ政権下の 5 年間における生活状況の変化と政党選好の関係を示したデータである。

表 4-7 生活状況の変化と政党選好（2010 年州議会選挙）

生活状況の変化	RJD	JD(U)	INC	Other	IND	N.A.	合計
改善した							
ヤーダヴ	5	2				1	8
ムスリム	1						1
指定カースト		4					4
小計	6	6				1	13
変わらない							
ラージプート	1						1
ヤーダヴ	2			1		1	4
ナイー	1						1
小計	4			1		1	6
悪化した							
バラモン			1				1
ヤーダヴ	7	1				2	10
バニア		1					1
ムスリム			1				1
指定カースト		3		1		1	5
小計	7	5	2	1	0	3	18
合計	17	11	2	2	0	5	37

（出典）現地調査

（略号）RJD：民族ジャナター・ダル（Rashtriya Janata Dal）、JD(U)：ジャナター・ダル（統一派）（Janata Dal[united]）、INC：インド国民会議派（Indian National Congress）、Other：その他の政党、IND：無所属、N.A.：不明

表 4-7 によれば、生活状況の変化と政党選好の間に相関関係を見いだすことはできなかった。生活が改善されたと回答した者（13 名）と悪化したと回答した者（18 名）の数にそれほど大きな違いはなく、かつ、改善されたと回答した者の間で政党選好は半分に割れているためである。生活状況の変化は、投票行動に重要な影響を与えなかったと指摘できる。

それではニティーシュ政権が選挙戦において何よりも強調した開発の成果は投票行動にどのような影響を与えただろうか。表 4-8 は、開発の評価と政党選好の関係を示した結果である。

表 4-8 開発の評価と政党選好の関係(2010 年州議会選挙)

開発の評価	RJD	JD(U)	INC	Other	IND	N.A.	合計
よくなった							
バラモン			1				1
ヤーダヴ	6	2				1	9
他の後進カースト	1	1					2
ムスリム	1		1				2
指定カースト		6		1		1	8
小計	8	9	2	1	0	2	22
変わらない							
ラージプート	1						1
ヤーダヴ	1					2	3
小計	2					2	4
悪くなった							
ヤーダヴ	7	1		1		1	10
指定カースト		1					1
小計	7	2		1		1	11
合計	17	11	2	2	0	5	37

(出典) 現地調査

(略号) RJD : 民族ジャナター・ダル (Rashtriya Janata Dal)、JD(U) : ジャナター・ダル (統一派) (Janata Dal[united])、INC : インド国民会議派 (Indian National Congress)、Other : その他の政党、IND : 無所属、N.A. : 不明

開発の評価と政党選好の関係についても相関関係を見いだすことは難しい。ニティーシュ政権の開発政策を評価している回答者の中で RJD 支持者 (8 名) と JD(U) 支持者 (9 名) がほぼ同数で割れているためである。ただし、生活状況に関するデータとは異なり、開発政策を評価しない回答者の多くがヤーダヴによって占められ、かつ RJD を支持していることは注目に値する。否定的な評価を下したヤーダヴを上回るヤーダヴがニティーシュ政権の開発政策を肯定的に評価していることから、カースト感情が開発の評価を左右しているとはいえないものの、否定的な評価を下した回答者の多くが RJD を支持したヤーダヴで占

められているという事実は、「アイデンティティの政治」と「開発の政治」の重なりを示唆している。

それではなぜヤーダヴは RJD を支持し、JD(U)を支持しなかったのだろうか。調査の結果、ニティーシュ政権下で村落社会におけるヤーダヴの影響力に変化が生じたことが判明した。

表 4-9 ニティーシュ政権下におけるヤーダヴの影響力の変化（2010 年）

社会集団	大いに増大	増大	同じ	低下	大いに低下	合計
上位カースト				1	1	2
ヤーダヴ			9	10	3	22
他の後進カースト			1	1		2
指定カースト			1	2	6	9
ムスリム				1	1	2
合計	0	0	11	15	11	37

（出典）現地調査

表 4-9 からわかるように、ヤーダヴを含む誰もが、ヤーダヴの影響力が増大したとは考えていない。逆に、ヤーダヴも含む多くの回答者は、影響力が低下したと考えている。とりわけ、指定カーストの多くは、「大いに低下した」と考えていた。裏返せば、指定カーストは身の安全を感じていることになる。このことを示したのが次の表 4-10 である。

表 4-10 ニティーシュ政権下における社会集団間の関係の変化（2010 年州議会選挙）

社会集団	大いに改善	改善	同じ	悪化	大いに悪化	合計
上位カースト			1		1	2
ヤーダヴ			13	6	2	21
その他の後進カースト			1	1		2
指定カースト	2	2	4	1		9
ムスリム			2			2
合計	2	2	21	8	3	36

（出典）現地調査

表 4-10 はニティーシュ政権下で、村落の社会関係がどのように変化したか質問した結果である。指定カーストだけが、関係がよくなったと回答していることがわかる。この点を具体的に質問すると、回答者は、ニティーシュ政権下においてヤーダヴの抑圧から逃れることができるようになったと答えた。例えば、農業労働に関し揉め事が起こった際、ラル

一政権下ではヤーダヴに殴られても訴えるすべがなかったが、ニティーシュ政権下では警察が対処してくれる。そのため、ヤーダヴが彼らを殴ることはなくなった。彼らにとっての「法と秩序」の問題とはまさにこのことであり、むやみに殴られないことは尊厳の回復を意味した。

裏返せば、ヤーダヴにとって指定カーストは言うことを聞かない存在になった。彼らの多くが、「指定カーストは、ニティーシュ政権下で横柄になった」と不満を口にしたのもこの文脈で理解できる。このような農村社会における日常の変化が、ヤーダヴを RJD 支持に向かわせたと考えることができる。

それでは、ニティーシュ政治は、「アイデンティティの政治」を焼き直した政治と結論づけることができるだろうか。この点を検証するために、さらに分析を進めてみよう。次の表 4-11 は、投票行動に際して最も重要な基準を二つまで選んでもらった結果である。

表 4-11 投票行動において最も重要な二つの基準 (2010 年州議会選)

	党	候補者	カースト	開発	業績	「法と秩序」	合計
上位カースト	2			1			3
ヤーダヴ	7	15	1	4			27
その他の後進カースト		1		1			2
指定カースト	2	1	2	5	2	1	13
ムスリム	2	2		1			5
合計	13	19	3	12	2	1	50

(出典) 現地調査

(注) 回答者の総計は 38 名であるが、最も重要な要素を二つまで選んでもらったため、それぞれを一つと数えた結果、総計は 50 となった。

ここではヤーダヴに注目したい。ヤーダヴのうち多数は「候補者」を選択している。この傾向は、投票に際し、候補者と党のどちらを優先するか質問した場合により明確になる。

表 4-12 投票に際し政党と候補者のどちらが重要か? (2010 年州議会選挙)

社会集団	党	候補者	わからない	合計
上位カースト	2			2
ヤーダヴ	6	15(17)	(1)	21(24)
他の後進カースト	1	1		2
指定カースト	7(8)	1		8(9)
ムスリム	2	1		3
合計	18(19)	18(20)	(1)	36(40)

(出典) 現地調査

(注 1) 回答数は 38 であるが、二人の回答者が「どちらも重要で区別できない」と回答したため、それぞれを 1 と数えた。その結果、総数が 40 となった。

(注 2) 回答者の内 4 名は実際には投票できなかった。そのため投票できなかった 4 名を含んだ数値を括弧内で示している。

表 4-12 からわかるように、ここでもヤーダヴが党よりも候補者に重点を置いていることがわかる。さらに同じ質問への回答を、支持政党毎に整理すると興味深い結果が判明する。

表 4-13 によると、JD(U)の支持者の多くは党の方が重要だと回答しているのに対し、RJD の支持者は、候補者の方により重きを置いている。さらに、RJD の支持者で候補者が重要だと回答した 13 名の内、ヤーダヴは 11 名を占めた。反対に RJD 支持者で党が重要だと回答した 7 名の内、ヤーダヴは 5 名を占めたものの、候補者を重視する回答者の半数以下である。ムルホ村のこれまでの投票行動を振り返ると、これは新しい傾向であると言える。

表 4-13 党か候補者か? (2010 年州議会選挙：政党支持者毎の分類)

党	党	候補者	合計
RJD 支持者	7	13	20
JD(U) 支持者	9	2	11
他党支持者	2	2	4
合計	18	17	35

(出典) 現地調査

(注) 回答者は 38 名であるが、投票できなかった 4 名、支持政党について回答を拒否した者 1 名を除いたため母数を 33 名とした。その上で、「どちらも重要で区別できない」と回答した者が二名いたため、それぞれを 1 と数えた結果、総数が 35 名となった。

ムルホ村における投票行動を独立後から検証すると、B.P.マンダルの存命中は、頻繁な党籍変更にもかかわらず、村民はおおよそ B.P.マンダルの意向に従ってきたとされる (表 4-14)。

表 4-14 B.P.マンダルとムルホ村民の投票行動

カースト	支持	不支持	不明	合計
ヤーダヴ	6	2	1	9
その他後進カースト	2	--	--	2
指定カースト	1	2		3
ムスリム	1			1
合計	10	4	1	15

(出典) 現地調査 (2004 年 2～5 月、2005 年 2 月) より筆者作成。

(注 1) 聞き取りを行った 52 名のうち、回答を得られた 15 名の投票行動を記している。数値は人数を示している。質問は、「B.P.マンダルの存命中は、B.P.マンダルを支持したか」という形で行った。B.P.マンダルが最後に戦った 1980 年選挙から 25 年が経過しており、当時は子供であったため投票権を持っていなかった者、まだ生まれていない者もあり、また投票権を持っていた者であっても、忘れたと回答した者もいた。

(注 2) 「指定カースト」の回答者はムサハール (Musahar) であった。

調査時は B.P.マンダルが死去してほぼ 25 年が経過しており、サンプル数の少なさや、村民の記憶の確かさという問題は存在する。とはいえ、2001 年の村長選挙でマンダル家と激しい選挙戦を戦ったラージ・キショール・ヤーダヴも、B.P.マンダルの生存中は支持していたと証言した⁽⁹⁾。マンダル家といわば敵対関係にある彼が支持していたということからも、村人の B.P.マンダルに対する支持を推測することができるだろう。この意味で、ムルホ村の投票行動は、党よりは候補者を重視していたと言える。

ところが、マンダル家の代替わりが起こると、ムルホ村の投票行動は変化する。1980 年州議会選挙で、息子の M.K.マンダルは村民の十分な支持を得ることができなかった。

表 4-15 ムルホ・パンチャーヤット投票行動 (1980 年州議会選挙)

カースト	INC	JNP (SC)	CPM	その他	合計
バラモン	1				1
ヤーダヴ	4	8	1	1	14
その他後進カースト	2	1			3
指定カースト	10				10
ムスリム	3				3
合計	20	9	1	1	31

(出典) 現地調査 (2004 年 2～5 月、2005 年 2 月) より筆者作成。

(注 1) 聞き取りを行った 52 名のうち、回答を得られた 31 名の投票行動を記している。質問は、「1980 年州議会選挙において、何党を支持したか」という形で行った。候補者名についても適宜確認した。

(注 2) CPM の活動家は CPM に投票したと述べたが、マデブラ州議会選挙区から CPM 候補は出馬していない。

(注 3) 「その他」に該当する政党はジャナター党であったが、マデブラ州議会選挙区から立候補した旧ジャナター党候補の内、JNP (SC)、JNP (SR)、JNP (JP) のいずれに投票したのかは定

⁽⁹⁾ ラージ・キショール・ヤーダヴ村長へのインタビュー (2004 年 5 月 14 日)。他にも、B.P.マンダルと個人的確執のあったヤーダヴも、「B.P.マンダルが存命中は、村人は皆支持していた」と証言した (2004 年 4 月 30 日、5 月 8 日インタビュー)。

かではなかった。

(略号)「その他後進」：ヤーダヴ以外の後進カースト。INC：インド国民会議派 (Indian National Congress)。JNP(SC)：ジャナター党 (セキュラー：チャラン・シン派)。CPM：インド共産党 (マルクス主義) (Communist Party of India[Marxist])。

会議派から出馬した M.K.マンダルに反旗を翻した主要な勢力は、ヤーダヴであった。ヤーダヴは、14 名中過半数を超える 8 名がローク・ダル (選挙管理委員会資料ではジャナター党[SC]) を支持している。1980 年選挙で M.K.マンダルを支持したヤーダヴは 4 名に過ぎず、これまで多数のヤーダヴが B.P.マンダルを支持した傾向とは逆転している。それでは、なぜヤーダヴの多数は、投票行動を変更したのか。

村のヤーダヴによると、会議派は上位カーストが支配するバラモン主義の党であったのに対し、ローク・ダルはこれらに反対していたからであった⁽¹⁰⁾。ここで注目すべきは、投票行動の基準が「候補者」から「党」に変化していることである。この傾向は、M.K.マンダルが再び会議派から立候補した 1990 年州議会選挙でより強まった (表 4-16)。

表 4-16 ムルホ・パンチャーヤット投票行動 (1990 年州議会選挙)

カースト	INC	JD	CPM	その他	合計
ヤーダヴ	1	12	1	0	14
その他後進	0	2	0	0	2
指定カースト	7	1	0	1	9
ムスリム	0	4	0	0	4
合計	8	19	1	1	29

(出典) 現地調査 (2004 年 2～5 月、2005 年 2 月) より筆者作成。

(注) 聞き取りを行った 52 名のうち、回答を得られた 29 名の投票行動を記している。数値は人数を示す。1990 年選挙に関し回答が得られた指定カーストはムサハールのみだった。「その他」に該当する政党はジャナター党であった。

(略号)「その他後進」：ヤーダヴ以外の後進カースト。SC：指定カースト。INC：インド国民会議派 (Indian National Congress)。JD：ジャナター・ダル (Janata Dal)。CPM：インド共産党 (マルクス主義) (Communist Party of India (Marxist))。

表 4-16 からわかるように M.K.マンダルに対する支持はさらに低下し、ジャナター・ダル支持者が二倍以上上回っている。とりわけヤーダヴは、「後進カーストの党」であるジャナター・ダルを強く支持している。大地主であるマンダル家の候補という「候補者」より

⁽¹⁰⁾ ヤーダヴ地主 (匿名希望) に対するインタビュー (2004 年 4 月 30 日、同年 5 月 8 日)。別のヤーダヴ教師は、「会議派は後進カーストのことを顧みなかったため、社会主義者を支持した」と述べた (2004 年 4 月 10 日インタビュー)。

も、「後進カーストの党」という「党」をより重視することになったと指摘できる。

「候補者」から「党」へと変化したヤーダヴの投票行動は、すでに検討したように、再び「候補者」に回帰しつつあると思われる。この点をさらに分析してみよう。

表 4-17 は、1989 年下院選挙より 2004 年下院選挙まで、一度も政党支持を変えなかった村民（supporter）と変えた村民（swing voter）が、2010 年州議会選挙で「党」と「候補者」のいずれを重視したか示した結果である。

ヤーダヴに着目すると、15 年間ラルー政権を支持してきた 9 名の有権者の内、7 名が党よりも候補者を重視していることがわかる。このことから、候補者が再び重視されるようになってきていると指摘できる。

表 4-17 党に対する忠誠心の変化（2010 年州議会選挙）

社会集団	2010 党	2010 候補者	合計
ヤーダヴ			
RJD supporter	2	7	9
JDU supporter	1	1	2
CPM supporter		1	1
swing voter		2	2
他の後進カースト			
JDU supporter	1		1
指定カースト			
JDU supporter	1		1
swing voter	4	1	5
ムスリム			
RJD supporter	2		2
swing voter		1	1
合計	11	13	24

（出典）現地調査

（注）「RJD supporter」とは、1989 年下院選挙より 1996 年下院選挙まで一貫して JD を支持し、1998 年下院選挙から 2004 年下院選挙まで RJD を支持し続けた有権者である。「JD(U) supporter」とは、1996 年下院選挙まで JD を支持し、1998 年から JD(U)を支持した有権者である。「CPM supporter」とは、一貫して CPM を支持し続けた有権者を指す。「Swing voter」とは、期間内に一度でも支持政党を変更した有権者を指す。「2010 党」とは 2010 年選挙において党を重視すると回答した回答者、「2010 候補者」とは 2010 年選挙において候補者を重視すると回答した回答者を示す。

今回、マデプラ選挙区から RJD の候補者として立候補したチャンドラシェカール教授は、JD(U)候補のラヴィ博士よりも若く、活動的なことで知られる。多くの時間を村で農民の不満を聞くことに割き、求めに応じて紛争の解決も行っている。仮定の質問に答えることは難しいが、仮に RJD が 2005 年 2 月選挙のように不人気な候補を擁立すれば、今回も他の選挙区のように敗北した可能性は存在する⁽¹¹⁾。このように、ムルホ村で最大のコミュニティーであるヤーダヴの投票行動は、「党」から「候補者」へと変わりつつあると指摘できる。

4. 開発への希求

それでは、なぜヤーダヴは投票行動を変化させたのか。十分なデータがないため作業仮説の域を出ないが、グローバル化の時代においてますます活性化する出稼ぎの影響を想定できる。ビハール州は冒頭で述べたように最貧州であることから、とりわけ貧困層は他州もしくは海外に出稼ぎを行うことによって生計を組み立ててきた。1991 年に導入された経済自由化以降、他州で経済成長が実現するにつれて、ビハールからの出稼ぎ労働者も倍増する（表 4-18）。

表 4-18 各県における出稼ぎ労働者の数と種類(%表示)

県名	1981-82			1999-2000		
	全労働者に占める出稼ぎ労働者の比率	出稼ぎ労働者の種類		全労働者に占める出稼ぎ労働者の比率	出稼ぎ労働者の種類	
		季節労働	長期		季節労働	長期
Gaya	10.12	64.71	35.29	19.39	67.19	32.81
Gopalganj	14.19	81.82	18.18	21.40	48.98	51.02
Madhubani	13.88	84.62	15.38	33.08	44.63	55.37
Nalanda	4.22	71.43	28.57	13.10	53.66	46.34
Purnea	6.40	92.31	7.69	12.93	76.71	23.29
Rohtas	7.84	81.25	18.75	8.54	25.93	74.07
合計	9.69	80.70	19.30	19.18	53.60	46.40

(出典)Sharma [2005:968, Table 4]

このことは二つの帰結を生み出した。第一が、ビハールの後進性の認識を人々により強

⁽¹¹⁾ CSDS の最新データによると、ヤーダヴの RJD に対する支持率は、2005 年 2 月 82%、2005 年 10 月 65%、2010 年 56%と下落の一途をたどっている。

く迫ったことである（表 4-19）。

表 4-19 ビハールは他州と比較して遅れているか？（2010 年州議会選挙）

社会集団	大いに遅れている	いくらか遅れている	全く遅れていない	合計
上位カースト	1	1		2
ヤーダヴ	17	4	1	22
他の後進カースト	2			2
指定カースト	8	1		9
ムスリム	1	1		2
合計	29	7	1	37

（出典）現地調査

表 4-19 からわかるように、多数がビハールは多いに遅れていると認識している。この認識を生み出した重要な要因は、出稼ぎ労働者がもたらした情報である。多くの回答者が、パンジャブやハリヤーナーに出稼ぎを行った主に指定カースト出身の農業労働者から、彼の地の先端的な農法、農業に対する手厚い保護政策を聞き、ビハールの後進性を強く認識している。

第二が、出稼ぎ労働者の増大に伴う労働力不足である。2004 年下院選挙の調査時においても労働力不足の問題は耳にしたが、今回はより多くの回答者が不平を述べた。例えば、マンダル家の元村長の息子で下院選挙に立候補した経験もある回答者は、中央政府の貧困救済策である全国農村雇用保障法（NREGA : National Rural Employment Guarantee Act）が農村における労働力不足を招いていると指摘し、公共事業を実施する代わりに地主に対して農業労働賃金の補助金を給付すべきだと主張した⁽¹²⁾。農業労働者が出稼ぎで高賃金を獲得するためにマンダル家の農地で低賃金労働を行うことを嫌い、この状況に NREGA が追い打ちをかけているという理由であった。マンダル家のような大地主が、我々にはパンジャブの農家のような高額な農業労働賃金を支払う余裕はないと認め、補助金を要請するほどに経済状態は逼迫していると言える。小地主、自作農であればなおさらであろう。グローバル化に伴う州間格差の拡大は労働力の流出を生み出し、他州と比較して低い生産性にとどまるビハール農業を更に圧迫する。ヤーダヴにとっても、開発は是非とも必要な成果であると考えられる。

ニティーシュ政権下で権力から疎外され、村落での影響力も低下したヤーダヴは、自らの尊厳を保つため RJD を支持した。しかし同時に、開発の成果も必要である。その二つの要請が、「党」から「候補者」へ、すなわち「仕事をする候補者」を支持する、という投票行動の変化を導いたと推定できる。

⁽¹²⁾ 2010 年 10 月 22 日インタビュー

ヤーダヴの次に大きな社会集団である指定カーストは、ニティーシュ政権下で身の安全を保障されると同時に尊厳を獲得した。加えて、第 2 章で検討したようにマハダリット・スキームによって経済的な便益も受けている。ニティーシュ政権の政策に対する高い評価が、候補者よりも党を重視する投票行動へ結びついたと指摘できる。

ビハール州の政治が「アイデンティティの政治」から「開発の政治」へと変化したと言えるのか、両者はどのような関係に立つのか、という問いを、村の政治と関連づけて考えることが本章の出発点であった。ニティーシュ政権の開発政策を評価しない回答者のほとんどがヤーダヴによって占められていたように、「アイデンティティの政治」と「開発の政治」は相容れないものではない。さらに第 2 章で検討したように、ニティーシュ政権の政策が、「アイデンティティの政治」と「開発の政治」の二本立てであることを考えれば、両者の距離はますます近くなるようにも思われる。両者の腑分けは容易な作業ではない。

それでは、「アイデンティティの政治」は変わらぬまま残っているのか。ムルホ村の事例を検討する限り、やはり変化を始めていると指摘できる。最大コミュニティであるヤーダヴの投票行動は、確かに変化した。変化を促しているのは、グローバル化に伴う労働市場の急激な変化であり、これに伴うより切実な開発への希求であると考えられる。ニティーシュ・クマール州首相が主張するような「開発の政治」が「アイデンティティの政治」を乗り越えるという直線的な形ではないにせよ、開発が政治の領域で重要になってきていることは確かである。それでは、最後にこれまでの分析をまとめることとしたい。

<参考文献>

[日本語文献]

中溝和弥 [2008] 「暴力の配当ーインド・ビハール州における政治変動とアイデンティティの政治ー」(東京大学大学院法学政治学研究科博士号取得論文 2008 年 3 月 28 日提出)

[外国語文献]

Kumar, Sanjay [2010] “A Cut and Paste Victory”, *Indian Express online*, 2010/12/06
<http://www.indianexpress.com/news/a-cut-and-paste-victory/720902/0>

Kumar, Sanjay, Mohammad Sanjeer Alam and Dhananjai Joshi [2008] “Caste Dynamic and Political Process in Bihar”, *Journal of Indian School of Political Economy*, vol. XX, January-June 2008, pp.1-100.

Sharma, Alakh N [1995] “Political Economy of Poverty in Bihar”, *EPW*, 14-21, pp.2587-2602.

--.[2005] “Agrarian Relations and Socio-Economic Change in Bihar”, *EPW*, March 5, pp. 960-972.